

説教「終わりの日の希望」

ヨハネ 11:17～27

「生老病死」は、人間がこの世で避けられない四つの苦しみである、と言われます。第一に、人間として生まれることによってもたらされる人間の他の生物や動物とは異なる様々な苦しみがあります。それから現代は高齢化社会と言われますが、だれでも齢をとります。齢を取ると若い時には経験しない、老いることによって味わうさまざまな苦しみがあります。それから病気と闘っている人がいますが、さまざまな病気による苦しみがあります。そして最後は、死によってもたらされる苦しみがあります。死は、だれも避けることができません。死とどのように向かい合うかは、だれにとっても大事な問題です。

「メント・モリ」という西洋の有名な言葉があります。「死を覚えよ・死ぬことを忘れるな」ということです。死は、だれも避けることができません。死は、いつ訪れるか分かりません。必ずしも年齢の順とは限りません。だから、いつ死に直面しても良いように、その準備をしておきなさい、ということ。昔から西洋では死についての教育が子どものときから大切にされていると言われていました。

『死の準備教育』をはじめ死生学に関する多くの著書があり、「生と死を考える会」などで知られている上智大学の元教授でアルフォンス・デーケンという有名な人がおられます。私は神学生時代にキリスト教書籍の出版販売をしている教文館で働いていたことがありますが、その頃何度かお会いしたことがあります。その時のデーケンさんの笑顔がたいへん印象的であったことを思い出します。その方の働きが大きかったのではないかと思います。最近では日本でも、ターミナルケアや終末期医療・ホスピス、そして人生の最期の希望をまとめる

ためのエンディングノートなどがかなり一般化し普及してきたのではないかと思います。

今日わたしたちに与えられたヨハネによる福音書第 11 章 17 節～27 節には、「イエスは復活と命」という小見出しがつけられています。

この物語の発端については 11 章 1 節～6 節に次のように記されています。

ある病人がいた。マリアとその姉妹マルタの村、ベタニアの出身で、ラザロといった。このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足をぬぐった女である。その兄弟ラザロが病気であった。姉妹たちはイエスのもとに人をやって、「主よ、あなたの愛しておられる者が病気なのです」と言わせた。イエスは、それを聞いて言われた。「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。ラザロが病気だと聞いてからも、なお二日間同じところに滞在された。

ここから知らされることは、「イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた」ということです。そしてイエスは、その愛しておられたラザロが病気だと聞いてからも、なお二日間同じ所・エルサレムに滞在しておられたということです。そして、その理由が、4 節で、「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである」と言われていることです。注目すべきことは、ラザロの病気による死が、「神の栄光のため」であり、「神の子がそれによって栄光を受ける」と言われていることです。

そして、イエスがエルサレムからベタニアのラザロの所に行かれた時には、「ラザロは墓に葬られて既に四日もたっていた」とあります。墓に葬られて四日ということは、仮死状態ではなく、完全な死を示す

ものです。そのためにマルタとマリアのところには、多くのユダヤ人たちが慰めに来ていたとあります。そのような中で、イエスを迎えたマルタの言葉は、21節、22節です。

「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています」です。

兄弟ラザロを亡くしたやり場のない悲しみとその責任をイエスに求めるような言葉です。と同時に、そのような中にもなおイエスに信頼しているマルタの姿を思わされます。このマルタに対してイエスは言われました、「**あなたの兄弟は復活する**」と！

そのイエスに対するマルタの言葉は、「終わりの日の復活のときに復活することは存じております」です。

当時のユダヤ人たちの中には、復活を信じるファリサイ派と復活を信じないサドカイ派の人々がいたと言われていています（使徒 23 章 8 節）。ここでマルタが言っている「終わりの日」とは、神の裁きによって、神の御業が完成する日・終末のことです。マルタは、その終わりの日の復活を信じているのです。しかしイエスは、そのようなマルタに対して言われました。

25 節、26 節。<「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。」>です！

この御言葉は、イエス御自身の十字架の死と復活を示すものです。イエスの十字架の死と復活を信じることによって、信じるすべての者に与えられる、**今ここで**、の出来事です。私たちがイエスの十字架と復活を信じることによって与えられる、現在的な、復活と命について、ヨハネ福音書は 5 章 24 節、25 節で、次のようなイエスの言葉を伝えています。（172 頁の下の段の真ん中から少し後の方です。）

「はっきり言うておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。はっきり言うておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。」です。

「永遠の命」、「死から命へ」移る、その条件は、イエスの十字架による罪の赦しを信じることです。イエスの十字架による罪の赦しを信じることによって、人はだれでも、「永遠の命」を与えられ、「死から命へ」と移される、ということです。

そして、この少し後の28節では、「時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き、善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出てくるのだ」と、ここでは将来的な終わりの日の復活について教えられています。

この御言葉によって示されるように「終わりの日」は、**今ここで**、という現在の側面と、**未だ**、という将来的な側面との両面があるということです。そしてキリスト者は、今ここで、と、未だ、という終わりの日・終末における緊張関係の中で生きるように求められているということです。

「わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。」とされていますが、これは肉体的に死なないということではありません。このことに関してパウロは、洗礼との関わりで次のように教えています。ローマの信徒への手紙6章4節～5節です。(281頁の上の段です。)

「わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。もし、わたしたちがキリストと一体になって、その死の姿

にあやかるならば、その復活の姿にもあやかれるでしょう。」

洗礼を受けるということは、イエス・キリストによる罪の赦しを信じることです。それによって死から命へと移されることです。

今日は、この後で聖餐式を行います。聖餐式は、イエス・キリストの十字架による罪の赦しを信じ、その恵みに感謝し、その恵みによって新たにされることです。その幸いを覚えたいと思います。

＜イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。＞

これが「今週のみ言葉」に選んだ聖句です。

イエスからこのように質問されたマルタは、

「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。」と信仰を言い表しています。

マルタのこの信仰表明は、イエスは、世に来られるはずの神の子であり、メシア・キリストであるということです。

マルタは、弟ラザロを病気で亡くした悲しみの中にありながらも、なお「イエスは復活であり、命である」という信仰を言い表しているのです。死の悲しみと絶望の中に、なお希望を与えられているということです。今日の説教は「終わりの日の希望」です。

終わりの日の希望とは、終末における復活を信じるということです。私たちが使徒信条の中で「かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを裁きたまわん」と言い表しているように、私たちの信仰は、終末における主の再臨と裁きを信じる信仰であるということです。

はじめに「生老病死」の四苦についてお話をしましたが、私たちにとって死が避けられない状況に置かれたとき、どうしたらいいのか。

どうしたら死を受容できるのか。大きな問題です。

『死ぬ瞬間』という（キューブラーロスだったでしょうか、名前を忘れましたが）ある医師の書いた有名な本があります。実際に死を告げられた人がどのような段階を辿るかを調べてそれを5段階に分けた本でロングセラーになっています。避けられない死について告げられた時、人はどのような反応を示すのか。

第一段階は、「拒絶」（死を受け入れようとしない）

第二段階は、「怒り」（なぜ、自分が死ななければならないのか）

第三段階は、「取引」（死から逃れるために何かをしようとする）

第四段階は、「抑うつ」（何もする気にならない）

第五段階は、「受容」（受け入れること）

人によっては必ずしもこの順番通りではありません。また、最後の受容にいたるかどうか分かりません。しかし望まれることは、死が避けられないことであるならば、それを受け入れることではないでしょうか。

そのためにキリスト者として何が大切なことか。それは何よりもイエス・キリストに結ばれていることです。常にイエス・キリストに結ばれて、主と共に歩むことです。そのために大切なことは、年度聖句で定めたように、「主の御声に聞き従う」ことです。そして、そのために祈ることです。その上で更に私たちが大切にしたいことは、イエス・キリストを中心とする神の家族として、共に礼拝を守り、互いのために祈ることです。そしてまだイエス・キリストの福音を知らない私たちの周囲にいる人々に、イエス・キリストによる福音を証しすることです。そして「終わりの日の希望」によって共に生きるようになることです。

祈り

主イエス・キリストの父なる神、復活節第4主日・5月最初の礼拝を、あなたの恵みと招きによって、共に守ることができましたことを心より感謝いたします。主の御声に聞き従って、私たちが終わりの日の希望によって、主に結ばれて、主と共に歩むことができますように常に守り導いてください。千葉南教会に連なる兄弟姉妹一人ひとりの歩みを導き、祝福してくださいますように。弱さを覚えている者、病床にある者・生きるのに困難を覚えている者を特別に顧み、いやし、助け、導いてください。主イエス・キリストの御名によって祈り願います。アーメン